

中学校英語科における評価規準と評価方法の開発

松浦 伸和 朝倉 匡夫 松尾 砂織

1 中学校英語科で付けるべき学力

平成12年12月の教育課程審議会答申『児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について』、さらに翌13年4月に出された「生徒指導要録の改善等についての通知」で、従来の「集団に準拠した評価(いわゆる相対評価)」に変えて「目標に準拠した評価(いわゆる絶対評価)」が導入された。外国語科でもそれを受けて新しい評価システムが導入されることになった。

今回導入された絶対評価を、「目標に準拠する評価」と規定したからには、まず「目標」の内実を明確にしなければならない。わが国では学習指導要領で目標が示されている。ちなみに中学校の学習指導要領で示されている外国語科の目標は、

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

となっている。学年別の目標は明記されていないため、中学校3年間を通しての目標である。グローバル社会の進展から、実際のコミュニケーションを目的とした外国語運用能力である「実践的コミュニケーション能力」の養成が中核となっている。この目標は、以下の3つの柱から成り立っている。

- ①外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
 - ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
 - ③聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。
- ③はさらに、

③-1 聞くこと(理解力)中心の言語運用能力を養う。
③-2 話すこと(表現力)中心の言語運用能力を養う。
に分割することができる。つまり、現在求められている外国語学力は、これら4つの下位学力から構成されていると解釈できる。それぞれ、①を「言語や文化についての知識・理解」②を「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」③-1を「理解の能力」③-2を「表

現の能力」と呼び、評価の場面ではこれらを「評価の観点」としている。

2 中学校英語科の評価規準

各観点を評価する際の視点、つまり「規準」について考察する。

(1) コミュニケーションへの関心・意欲・態度

この観点は、「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」という目標に対応している。したがって、学習態度ではなく、コミュニケーションへの関与の姿勢、つまり、積極的に英語を運用しようとしているかどうかが問われている。それゆえ、「言語活動への積極的な取り組み」が規準の1つになる。積極的、意欲的に自分の考えを相手に伝えようしたり、相手の考えを理解しようとしているかどうかを評価するのである。

この観点では、もう一つ、「コミュニケーションを継続する努力」が規準になっている。コミュニケーションが破綻するのを防ぐために、各種の手だてで継続する努力が必要である。いわゆるコミュニケーション・ストラテジーを積極的に使用しなければならない。その努力の様子を評価するのである。たとえば「話すこと」であれば、「理解してもらるように、別の語句や表現で言いかえる」や「説明して伝える工夫をしている」「つなぎことばを用いるなど不自然な沈黙をせず話し続けている」などがその具体例になる。

(2) 表現の能力・理解の能力

これらの観点は、今回の改訂で導入された「実践的コミュニケーション能力」と呼ばれる実際のコミュニケーションを目的とした言語運用力の評価である。その評価規準を考えるに当り、コミュニケーション能力を分析的に捉える必要がある。

コミュニケーション能力の下位能力については、研究が進むにつれて細分化される傾向にある。それを詳細に論じる紙幅はないので、ここではその源になったカナルらのモデルをもとに検討する。彼らは下位能力

として、文法能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力の四つをあげている。この中で、方略的能力は(1)の観点で評価できる。したがって、それ以外の能力を評価すればよいことになる。そのうち文法能力は、規則に沿った語句や文を表現したり理解できる能力で、「正確さ」と結びついている。残りの二つはそれぞれ、場面や相手に応じてふさわしい使い分けができる能力(社会言語学的能力)、文章全体をつながりよくまとめて表現し、理解できる能力(談話能力)であり、「適切さ」と大きく関係していると言える。そのような考え方に立ち、その二つが評価規準になっている。

(3) 言語や文化についての知識・理解

この観点は、「言語についての知識」と「文化についての理解」を規準としている。前者は、言葉のもつ仕組み、意味など単なる言葉についての知識のみならず、その働きや、場面にふさわしい表現を知っているといった言語運用についての知識も含まれる。また、主としてコミュニケーションを遂行するのに必要な知識を指しているのだから、明示的な知識に限るものではない。むしろ明示的な知識はこれまで強調されすぎてきたのである。

後者は、ことばの背景にある文化の理解をどの程度深めたかが問われる。すなわち、家庭、学校や社会における日常生活や風俗習慣、また人々のものの見方や考え方などの違いについての理解を評価するものである。

3 英語科における評価の方法

技能の習得を目指し、コミュニケーション能力を養成することが主目的である英語教育において、これまでの評価は、中間テストや期末テストなどにみられるように、いわゆるテスト法、それも筆記試験を用いて行うことが主流であった。その背後には、ペーパーテストの結果と実際の言語使用との間には強い関連があり、前者から後者が推測できるという予測があったからであろう。実際には隔たりがあることが多い。「言語や文化についての知識・理解」の観点の評価には適した方法であろうが、「表現の能力」や「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」には不適である。技能を評価するには、直接技能を使わせなければならない。

ともかく、学力を多角的に診断するには、「学期末や学年末にペーパーテストで」といった1つの方法だけに頼るのではなく、評価場面や時期などを含め、各規準をもっとも妥当でふさわしい方法で評価しなければならない。以下に、いくつかの方法をあげておく。

(1) テストによる方法

これは定期試験などで広く用いられており、なじみ

深い方法である。もちろんこの方法はペーパーテストに限ったものではなく、音読テスト、聞き取りテスト、スピーチテスト、インタビューテスト、小テストなど様々な種類が含まれる。だが、広く用いられるがゆえに、注意が必要である。

(2) 観察による方法

観察することは評価の基本である。教師は常に生徒の活動や応答を観察しなければならない。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」は言うに及ばず、「表現の能力」や「理解の能力」の評価においても、適した方法である。これは、学習の過程において行われるという特徴がある。だがそのために、評価ばかりに気を取られ、肝心な指導の方がおろそかになるようでは本末転倒である。それを防ぐには、特徴的で際だった行動のみを記録するのもし、あらかじめその時間で評価する生徒を決めておくことも考えられる。

(3) 作品や提出物による方法

この方法は、生徒の学習の跡を残す作品(作文やレポート、録音テープ、演じたスキットなど)やプリント、ワークシートなどを活用して評価する方法である。その際、どうしても完成した(提出したり演じた)最終的な結果(プロダクト)だけを評価の対象にする傾向がみられる。だが、そこに行き着くまでの過程(プロセス)も同じように評価の対象にしなければならない。したがって、時には下書きやメモを見るよう心がけたい。

(4) 自己評価・相互評価による方法

最近よく用いられている方法である。自己評価をすることによって自分の学習を振り返ったり確かめたりすることができ、次の学習課題を考えるきっかけになる。また、相互評価をするには、評価のポイントを知っておかなければならない。そういう見方を育てることで、学習結果を客観視する態度が養える。それが自らの学習をモニターする力になるのである。だが、この方法はあくまで指導の一環であり、いわゆる「評価」の方法とするには慎重でなければならない。

ここまでの、英語科における評価の考え方を述べてきた。しかし、評価規準や評価方法をめぐっては、依然として混乱が見られる。そこで次節で中学校における2つの事例を挙げて、評価方法についての在り方を考察することとする。

4 英語科における評価の実践事例

4.1 第2学年の実践

「Reading Plus2 Chris and the Puppets」

(第2学年12月 全5時間)

1 本課の主たる目標

	<p>語らしい発音に意識して、音読をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 登場人物の気持ちを考えた音読か暗唱をする。 感情（楽しい、悲しい、苛立っている気持ち）を表現する読み方ができるかどうか A L Tからのアドバイスを聞く。 	イの①
後日	<p>○実力テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> 本文の英文を流し、それを聞いて、適切な答えを選ぶ。 与えられた場面に応じて、語句を書き換える問題 場面を与えて適当な表現を選択する問題 	ウの② ウの① ウの①

4 観点別評価の進め方

(1) 評価規準 アの①「誤りを恐れず積極的に音読している。」

(7) 評価方法：活動の観察と発表の観察

(4) 評価の手順：2, 3, 4時間目で評価する。

ペアワークあるいはグループにおいて積極的に音読しているかどうかを観察する。

(7) 評価の決定：音読していれば○と判断し3回の機会を設定し決定する。

- が2つの場合がBと判断する。
- が一つの場合やない場合は積極的に音読していると認められないのでCと判断した。
- が3つ以上の場合には積極的に音読していると認められるのでAと判断した。

(2) 評価規準 イの④「正しいイントネーションで音読することができる。」

あとで述べる3年生と同様なので省略する。

(3) 評価規準ウの①「物語の流れを正しく読み取ることができる。」

(7) 評価方法 ワークシートチェックと定期テスト

(4) 評価の手順 第3時間目と定期テストで評価する。

・リーディングポイント（3時間目）

本文を読んで、内容にあっているものにはT、違えばFで答えなさい。

- (a) The puppets are going to play. (T)
- (b) The puppets are going to sing. (T)
- (c) The puppets are going to sleep. (T)
- (d) The puppets are going to find a girl. (F)

・定期テスト（後日） 以下のように場面を読んで、内容に関する問題を4題出題した。

(例) 次の対話文を読み、あとの問いに答えなさい。

Pitch : We live here. Why are you here?

Chris : I'm looking for a new life. People are always saying the ①same thing to me. "Chris, do this. Chris, do that." I hate it. So I left.

Ran : And you want to be free? Like us?

Patch : You want to play all night?

Chris : Yes! Yes! ②あなたたちはとても楽しそうに見えます。 I want to be a puppet, too. ③It'll be fun.

(1) 下線部①の内容を表している英文をそのまま本文中から書き抜きなさい。

(2) 下線部③の It はなにの何を表しているか、日本語で答えなさい。

(ウ) 評価の決定

(A) リーディングポイント

- が1つの場合がBと判断する。
- がない場合は適切に読みとれていると認められないのでCと判断した。
- が2つの場合は適切に読みとれていると認められるのでAと判断した。

(B) 定期テスト

- 4つの設問に3つ以上答えれば○とし、安定的に理解できていると認められるのでAと判断した。
- 4つの設問に2つ答えている場合△は、部分的に理解できているとしBと判断した。
- 4つとも答えることができなければ×とし、理解できていると認められないのでCと判断した。

(4) 評価規準 ウの②「自然な口調で話されたり読まれたりする英語の内容を聞き取ることができる。」

(7) 評価方法：ワークシートチェックと定期テスト

(4) 評価の手順：

(A) ワークシートチェック

1, 2, 時間目で評価する。本文に関する設問を聞いて、答えを記入させる。

(1時間目)

- ・クリスは何をさがしているのか。
- ・クリスはどんな女の子か。
- ・ランの考えは何か。
- ・人形たちはなぜそんなに楽しそうなのか。(リスニングによる設問)
- ・The puppets are going to play.

- The puppets are going to sing.
- The puppets are going to sleep.
- The puppets are going to find a girl.
- The puppets know why the girl is sleeping.
- Ran wakes the girl up.
- The girl knows the puppets.
- The girl lives here.

(2時間目)

- クリスがいつも人から言われることは何か。
- 昼間、人形たちがしなければならないことは何か。また、どうしてか。
- チョップは自由についてどんな考えを持っているか。
- 最後に分かったことをのべなさい。
(リスニングによる設問)
- Chris left her home.
- Chris wanted to be free.
- The puppets can play all night.
- The puppets are free all day.
- The puppets work all day, but they are happy.
- Chris still wants to be a puppet.
- Chris and the puppets were having a dream.
- Chris left home, but she came back.

(B) 定期テスト 以下のような場面を与えて文を組み立てる問題を5問設けている。

(例) これから英語劇 Chris and the Puppets の一部 (P59 と 60) を放送します。そのあと、4つずつ合計8つの問題文が流れます。その問題文が、本文の内容とあっていればT、違えばFで答えなさい。

(ウ) 評価の決定

(A) ワークシートチェック 評価は2回に分けて行った。

- 6つ以上聞きとれていれば○とし、Aと判断した。
- 4つ聞きとれていれば、△とし、Bと判断した。
- 全く聞きとれていなければ、×とし、Cと判断した。

(B) 定期テスト 8問中6問答えていれば○とする

- 6つ以上聞きとれていれば○とし、Aと判断した。
- 4つ聞きとれていれば、△とし、Bと判断した。
- 全く聞きとれていなければ、×とし、Cと判断した。

た。

4. 2 第3学年の実践

「Unit 4 An American Rakugo-ka」(第3学年7月)

1 本課の主たる目標

- 書かれた内容について大切な部分を読み取り、正しい強勢で音読できる。
- 疑問詞+to と It is … for … to~を含む文の意味・構造を理解する。

2 本課の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度

- ①誤りを恐れず積極的に音読している。

イ 表現の能力

- ①正しい強勢で音読することができる。

ウ 理解の能力

- ①書かれた内容について、大切な部分を読み取ることができる。

エ 言語や文化についての知識・理解

- ①疑問詞 +to と It is … for … to~ を含む文の意味・用法を理解している。

3 指導と評価の計画

時間	ねらい・学習活動	評価
1	<ul style="list-style-type: none"> ○疑問詞 +to の文の形・意味・用法を理解することができるようにする。 • ターゲットセンテンス(疑問詞 +to を含む文)を理解する。 • how to, what to の基本表現練習をする。 • 本文の内容について質問に答える。 • CDを聞いて強く読む語を確認する。 • 強勢に気をつけながら本文の音読練習をする。 • 本文(パンフレット)の内容を理解する。 	エの①
2	<ul style="list-style-type: none"> ○ペアワークにおいて英語を積極的に話すことができる。 ○It is + 形容詞+ for 人 不定詞の文の形・意味・用法を理解することができるようにする。 • It~for~to を含む基本表現練習をする。 • 本文の内容を読み取る口頭で答える。 	エの①

	<ul style="list-style-type: none"> ・日米の違いの理解 ・Your Turn で It + for + to を使って対話をする。 ・シャドウイングなどを利用して本文の音読練習をする。 	アの①
3	<ul style="list-style-type: none"> ○書かれている大切な部分を正しく読み取ることができる。 ○疑問詞 + to の文と It ~ for ~ to の形・意味・用法を理解することができる ・文の強勢に気をつけながら音読練習をする。 ・レストランで「すみません。」と呼ぶときの日米の違いを理解する。 ・Your Turn でジェスチャーを使って、相手に言いたいことを伝える。 ・疑問詞 + to の文と It ~ for ~ to の文型を含む文の空所を答える。 	ウの① エの①
4	<ul style="list-style-type: none"> ○日米の言語表現の違いを正しく読み取ることができる。 ○正しい強勢を用いて音読できる。 ・Your Turn で知らない単語があっても工夫して相手に伝える。 ・本文の音読をペアで発表する。 ・本文を読み取った後に質問に答える。 	イの① ウの①
5	<ul style="list-style-type: none"> ○取材インタビューを読み情報を正しく読み取ることができる。 ・インタビューの内容を読みとった後、質問に答える。 ・インタビューの続きを聞き、さらにわかったことをメモする。 ・取材メモをもとに落語家の紹介記事を書く。 ・紹介記事を音読する。 	ウの① アの①
6	<ul style="list-style-type: none"> 正しい強勢を用いて音読できる。 ○ペアワークにおいて英語を積極的に話すことができる。 ・本文の音読をペアで発表する。 ・It is + 形容詞 + for 人 to ~ を並べかえて文を作る。 ・It is + 形容詞 + for 人 to ~ を使って自分の考えを書く。 	イの① アの①
後日	<ul style="list-style-type: none"> ○定期テスト ・疑問詞 + to の文と It is + 形容詞 + for 人 to ~ の文型 与えられた場面に応じて、語句を並べかえる問題 	エの①

4 観点別評価の進め方

- (1) 評価規準 アの①「誤りを恐れず積極的に音読している。」
2年生と同じなので省略する
- (2) 評価規準 イの①「正しい強勢で音読することができる。」
(7) 評価方法：ペアで発表させて音読をチェック
強く読む語 4カ所をチェックする。
(4) 評価の手順：強く読む語を確認しながら音読練習した後、発表する。
強く読む語 3カ所正しく発音できていれば○とする。
Ken : What do you want to do this weekend?
Ellen : It's hard to decide. Any ideas?
Ken : How about going to rakugo?
Ellen : Well, it's difficult for me to understand Japanese.
Ken : Don't worry. This rakugo is in English.
Ellen : Oh, good!
(7) 評価の決定：
・○が1つの場合がBと判断する。
・○がない場合は適切に音読できていると認められないのでCと判断した。
・○が2つの場合は適切に音読できていると認められるのでAと判断した。
- (3) 評価規準 ウの①「書かれた内容について、大切な部分を読み取ることができる。」
(7) 評価方法 ワークシートチェック
(4) 評価の手順 第3, 4, 5時間目で下記のリーディングポイントを与え評価する。
(A) リーディングポイント1 (3時間目)
(a) 日本のレストランで注文したい時に何と言いますか。
(b) アメリカのレストランで注文する時に、どうしますか。
(c) 登場人物にとってなぜ日本で料を注文するのが難しいのですか。
(B) リーディングポイント2 (4時間目)
(a) 誰がビルをレストランに連れて行きましたか。
(b) ビルの友達が水を頼んだ時、その友達は何をしましたか。
(c) ビルの友達が叫んだ時、レストランにいた人たちはどうしましたか。
(C) リーディングポイント3 (5時間目)
(a) 来日後何をしていたか。

(b) 落語を始めた理由

(c) 落語で最も難しいこと

(7) 評価の決定

- ・ 3つの設問に2つ以上答えれば○
- ・ 1つの設問に1つ答えている場合△
- ・ 3つともこたえることができなければ×
- ・ 4回判定し、4文の2の機会を理解していれば、つまり○が2つの場合は理解できていると判断することにした。
- ・ ○が2つの場合がBと判断する。
- ・ ○が1つの場合やない場合は理解できていると認められないのでCと判断した。
- ・ ○が3つ以上の場合には安定的に理解できていると認められるのでAと判断した。

(4) 評価規準エの①疑問詞+to と It is … for … to ~を含む文の意味・用法を理解している。

(7) 評価方法：ペーパーテスト

(4) 評価の手順：

(A) 定期テスト 以下のような場面を与えて文を組み立てる問題を5問設けている。

(例) 1 私たちにとって英語を勉強することは重要です。

(study, English, it's, for, to, us, important)

(例) 2 私は扇子の使い方を知っている。

(use, to, a fan, know, how, I)

テストを回収・採点

(B) 小テスト 以下のような場面を与えて空所に補充させる問題を5問設けている。

(例) 1 日本語を理解するのは難しい。

It's difficult () me () understand Japanese.

(例) 2 あなたは何をすればよいかわかりますか。

Do you know () () do?

(7) 評価の決定 5問中3問答えていれば○とする

- ・ 2回の評価場を設定した。
- ・ ○がない場合は、理解していると認められないのでCと判断した。
- ・ ○が1つある場合は、理解していると認められるのでBと判断した。
- ・ ○が2つの場合は、「確実に」理解していると認められるのでAと判断した。

5 評価方法の開発

本節では、前節で提示した実践報告を基に、新たな評価方法の開発部分を解説し、その内容を検討するこ

ととする。

(1) 評価計画の策定

言うまでもないが、学校における教育活動はすべて計画的になされるものである。したがって、計画を立て、実践(指導)し、評価するという流れを踏まなければならない。その流れの中で評価は最後の段階にくるものであるから、評価する内容はその前段階で指導しておかなければならない。したがって授業計画には、従来から盛り込まれている指導目標や指導手順などの指導計画に加え、評価計画も含まれる。ある単元の計画には年間や学期など長期の計画が前提となるが、今回は紙幅の都合上、単元における評価方法の開発のみを開発し、検討する。

まず、各単元の目標を基にして、単元ごとの評価規準を策定することになる。この点については以下のような考えに基づいて行った、すなわち、「本課の主たる目標」を、それぞれ評価できる観点と評価規準に当てはめる、という方法である。単元の目標とは、その単元で必ず身に付けさせるべき技能や知識などを示した内容であるから、その点を中心に評価規準を作成するという考え方に立脚している。

たとえば中3の実践で、最初の目標である「書かれた内容について大切な部分を読みとり、正しい強勢で音読できる。」(読むこと)では、前半の「書かれた内容について大切な部分を読み取る」は「理解の能力」の観点で、「大切な部分を読み取る」とは実際の読む活動において求められる下位技能なので、「適切さ」で評価すると判断できる。また後半の「正しい強勢で音読できる」は、評価する観点は「表現の能力」で、「正しい強勢」とは言語規則に関わることなので「正確さ」で評価できると判断した。同様に、二つ目の目標である「疑問詞+to と It is … for … to~を含む文の意味・構造を理解する」は「言語や文化についての知識・理解」の「言語についての知識」で評価することとした。このような手順で、この単元では3つの評価規準を設定したが、それに加えて、音読時の態度を「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点で評価するため、「誤りを恐れず積極的に音読している。」を評価規準として加えた。

次に、指導過程のどの段階で、どの評価規準を、どのような方法で評価するのか計画を立てなければならない。1時間の授業ですべての規準を評価するのは不可能である。評価あって指導なしの状態にならないように、せいぜい二〜三が限度である。また、その単元を扱う数時間で、各規準を数回評価するような計画にしなければならないとを考慮して評価計画を立案した。

(2) 評価方法の開発

評価規準を見ると、「正しいイントネーションで音読することができる。」「物語の流れを正しく読み取ることができる。」「自然な口調で話されたり読まれたりする英語の内容を聞き取ることができる。」(以上中2)、「正しい強勢で音読することができる。」「書かれた内容について、大切な部分を読み取ることができる。」(以上中3)など実践的コミュニケーション能力と呼ばれる英語技能を評価する場面が多い。それらについてはパフォーマンス評価を実施した。

たとえば、中3の実践で「正しい強勢で音読することができる。」については、ペアで音読してチェックするという方法を取り、具体的には強く読む語4カ所をチェックすることとした。また、中2の実践の「自然な口調で話されたり読まれたりする英語の内容を聞き取ることができる。」については、ワークシートチェックと定期テストの2回の評価場面を設定して、それぞれ聞き取りテストを行った。

また、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点では、中2、中3のいずれも「誤りを恐れず積極的に音読している。」が評価規準であるが、単元を指導する数時間の中に複数回活動を観察する場面を設定して評価した。

(3) 観点別評価の判断

観点別評価の判断とは、評価規準ごとに「それぞれの規準ごとに、「十分満足できる(A)」「おおむね満足できる(B)」「努力を要する(C)」のいずれの段階にあるのか判断することである。その判断は以下のような考え方に立って行うことにした。

例えば、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点において、「誤りを恐れず積極的に音読している。」という評価規準を立てた。評価規準は、「おおむね満足できると判断される」段階のものであるので、

その段階に到達していればBと判断できる。すると、Aと判断するには、基準を設定する必要がある。その際、一般的には次のような二通りの考え方がある。

一つは、到達点があり、現在その何割程度に達しているかで判断する考え方である。例えば十個の英単語のうち何個覚えたかなどはこれに当たろう。もう一つは、達したり達しなかったり変動するような場合である。この場合は、どの程度の割合(例えば三回中二回など)で達しているかで判断する必要がある。言語学習の場合、特に技能においては、後者が適用される。以上のことから考えて、以下のような手順で判断した。

たとえば、「誤りを恐れず積極的に音読している。」という評価規準について、この単元で音読活動をする時に複数回評価を行う。その結果、「誤りを恐れず積極的に音読している」ことが認められる時に「おおむね満足できる」と判断し、それが常に認められる時に「十分満足できる」と判断した。また、認められない時に「努力を要する」と判断した。

6 課題と展望

「目標に準拠した評価」の導入は、評価史に残る大転換であり、大きな意義がある。だが、最初にも述べたが、まだ混乱している部分も多く、その定着にはさらに時間を要するかもしれない。その改善策としてすぐれた具体例を提示することは一助になる。今回は「聞くこと」「読むこと」を中心として中2と中3での単元を通しての実践を提示した。

学力に対する関心が高まり、今まで以上に学力を正しく評価することが求められている。そのためにもさらなる開発をして、それを実践を通して検証するという不断の取組が求められる。今後もそれを継続して行いたい。